

鶴窓会だより

題字：元会長 佐藤 輝康氏 書

発行
山形大学農学部鶴窓会
発行日 2016年12月10日
第23号
〒997-8555 鶴岡市若葉町1-23
山形大学農学部内
TEL・FAX 0235-28-2897
ホームページ kakusokai.net
E-mail kakusokai@kdp.biglobe.ne.jp

特集1 鶴窓会福島県支部が発足しました..... 06
 特集2 山形大学農学部創立70周年記念事業について..... 07
 【会員の声】..... 10 【同期会報告】..... 26



「山形大学ビーチサッカー大会」会場由良海岸にて

山形大学農学部鶴窓会
会長 佐藤 農一
(昭和41年農学科卒)

会員の皆様には日頃より鶴窓会に格別のご支援とご高配を賜わり感謝申し上げます。また、各会員が職域や地域に貢献され、紙面をとおしてこれらを共有すること喜びとしております。

本年は、4月15日の熊本大地震に始まり、真夏の異常高温の連続や数々の台風によるたび重なる大洪水被害と自然災害の前に立ちつくすことが多く、被災者に対してお見舞いを申しあげます。

さて、我が鶴窓会にとって、農学部創立70周年を祝う来年10月を前にして、喜ぶべき

ことがありました。それは本年2月より動きのあった福島県支部の設立であります。詳しくは特集ページに松村新支部長が設立経過など寄稿されていますので、是非二読お願いたします。6月18日郡山市での第2回支部総会に私も参加させていただきました。また同窓の輪が広がった実感を持ちました。去る3月17日の学位記授与式に臨んでも母校が輩出する地域に貢献する人材について触れていますが、まさに東北大震災後の福島の復興に貢献しておられる数多くの同窓会員との出会がありました。福島県の場合は福島県職員が会員相互の呼び掛けが功を奏しておりました。若い会員から幅広い年齢層にいたっていることが特徴でした。多くの園芸関係者からは公職を通しての貢献事例もあり、日本の食と安全を守るため奮闘しておられることも伺うことができました。また旧学科の農業工学による「キヤタピラ」や林学科による「谷地幅」の会所属一部会員の抱えている鶴窓会に対する思いも聴くことができ参考になりました。

森の時間」や「森のソムリエ養成講座」、「つるおか森の保育研究会」など、森林文化都市をめざす鶴岡市のユニークな取り組みについても紹介しています。さらに、小山教授の書き下ろしサイエンス、「いま、里山で何が起きているのか」、「プナの豊凶物語」、「試論 森の歴史と文明」を収録しました。

鶴窓会各支部総会の開催時期は例年6月に関東支部、宮城県支部と開催され、本年もそのように実施され、6月12日と重なったところから、飛んで9月に入ってから山形村山支部や関西支部総会などの順になっていきますが、いずれも会員の参加しやすさを考慮に決めているようです。

私はここ数年宮城県支部総会に参加しています(関東支部総会には菅原副会長が参加)。本年は例年より参加者が少なかったが、富樫支部長の言葉にあったように数に「喜憂することなく同窓の好の交流が継続することの力強さを強調されています。総会開催形態は議事のあとに多くは会員による活動が講演会形式で行なわれ(株)キノックスの郡山氏よりきこの産産を担う話題が提供されました。懇親会では予てよりの稲作を巡る農業法人化など農政課題で自らの問題意識を交換するなど有意義なひと時でした。

いままでもなく鶴窓会活動の基礎は支部活動の活性化にあるわけで、とくに若い会員の参加によりフレッシュ

と幅広い感ずるとともに世代間交流が促されていると思われました。来年9月に宮城県で開催される全国和牛能力共進会を担当することになった若手女性会員が自ら発言する姿は頼もしいものでした。

そして山形村山支部総会では私が紹介する福島県支部総会の様子に関心を寄せられ、会員相互のネットワークを強化する発言がありました。また、昨年から可能にした一般会費のコンビニ支払いについても好評であったことに安堵するとともに今後一般会費納入者の減少に歯止めがかかることを期待したいものです。

農学部創立70周年記念事業に関しては、現在名簿作成業務は鶴窓会で、事業運営に関しては農学部内部で実務者間の打合せ会合の後に進行する予定になっています。

最後にこの紙面は会員皆様からの会費によって賄われています。一般会費納入についてはどうぞご理解の上よろしくお願ひ申し上げます。

(平成28年9月20日記)

し、明日もまた豊かな食が得られると信じて生きている。しかし、いつでも食べたいだけ食べられる生活が実現したのは、戦後わずか数十年のことである。いつしか自然との向き合い方や、飢餓と戦っていた事実も、保存食の大切さも忘れ、この文明社会がつけられた経緯さえ忘れられた感がある。

そうしたなか、世界人口の増大、自然災害、環境汚染、生物の絶滅、資源の枯渇などの諸問題が立ちはだかり、未来の食の確保が不安視されるようになってきた。

この本は、財団法人味の素食文化センターが主催する2015年度の「食の文化フォーラム 採集から栽培へ」で分野の研究者が学際的に議論した記録集である。未来の食のあり方を考えるヒントが満載のこの本を、楽しみながら役立てていただければ幸いです。

「人間と作物」採集から栽培へ
定価2500円+税 (ドメス出版)

食料生命環境学科
安全農産物生産学コース
教授 平智

本書は、ブナ林をはじめとする森の生態学が専門の故・小山浩正教授が中心になって、

庄内日報紙に月1回連載してきた「森の時間」山形大学からみなさんへ」の約40回分に新たな書き下ろしエッセイを加えて編集したものです。

小山教授を代表者として、農学部のさまざまな専門分野のスタッフが参画して取り組んだ文部科学省の特別プロジェクト「新・里山生態系管理システムの構築―利用しながら保全する生物多様性―」(研究期間・2011～2013年)の主な研究成果、つるおか

著書の紹介

農学部図書館長
教授 野堀 嘉裕
(昭和55年大学院農学研究科修了)

平成26年、ハイデッカー研究で世界的に有名な哲学者の木田元先生が逝去されました。木田先生は本学の前身である山形県立農林専門学校(第一期生(昭和25年卒業)でした。本年、木田先生の奥様から農学部図書館に木田先生の多くの著作が寄贈されました。図書館では写真のような書架を設置して木田先生の業績を記念することとしました。

木田先生の講話を最初に聞いたのは、山形大学農学部創立50周年記念講演の時でした。哲学はたぶん誤訳で希哲学だったらもっと親しみやすかったらどうという興味深い話や、技術の革新は生命の論理以上に進んでしまうと恐ろしいことになるといった農学部にも関連する話を聞いたことを思い出します。ご冥福をお祈りいたします。

故・木田元氏ご家族様よりの寄贈図書一覧 (平成28年8月29日)

著書	出版社	発行日
「現象学」	岩波新書	1970年
「ハイデガー」二十世紀思想家文庫	岩波書店	1983年
「現代の哲学」文庫化	講談社学術文庫	1991年
「ハイデガーの思想」	岩波新書	1993年
「反哲学史」	講談社	1995年
「現代哲学の岐路」文庫化	講談社学術文庫	1996年
「ハイデガー存在と時間の構築」	岩波現代文庫	2000年
「哲学の余白」	新書館	2000年
「反哲学史」改訂新版	講談社学術文庫	2000年
「最終講義」	作品社	2000年
「ハイデガー」文庫化	岩波現代文庫	2001年
「マッハとニーチェ 世紀転換期思想史」	新書館	2002年
「待つしかないか。二十一世紀身体と哲学」	春風社	2003年
「猿飛佐助からハイデガーへ」	岩波書店	2003年
「ハイデガー拾い読み」	新書館	2004年
「反哲学入門」	新潮社	2007年
「なにもかも小林秀雄に教わった」	文芸春秋	2008年
「精神の哲学・肉体の哲学」	講談社	2010年
「蘭屋になりそこねた哲学者」	ちくま文庫	2010年
「反哲学入門」	新潮文庫	2010年
「ハイデガー拾い読み」	新潮文庫	2012年
「技術の正体」	デコ	2013年
「哲学散歩」	文芸春秋	2014年
「マッハとニーチェ」	講談社学術文庫	2014年
「基礎講座・哲学」	ちくま学芸文庫	2016年
メルロ=ポンティ「行動の構造」	みすず書房	1964年
メルロ=ポンティ「眼と精神」	みすず書房	1966年
バノフスキー「象徴形式としての遠近法」	哲学書房	1993年
ハイデガー「シェリング講義」	新書館	1999年
アンドレ=コント=スポンヴィル「哲学はこんなふう」	紀伊國屋書店	2002年



「鶴窓会だより」第23号の発刊によせて

目次

会長挨拶	1	同期会	26
佐藤 晨一(昭和41年農学科卒)		富樫 二郎(昭和36年農学科卒)	
農学部長就任のご挨拶	3	齋藤 健一(昭和52年園芸学科卒)	
林田 光祐		伊藤 祐二(昭和54年農芸化学科卒)	
着任のご挨拶	3	芳賀 修一(昭和46年農学科卒)	
井上 奈穂 浦 剣 中坪 あゆみ		荒生(松崎) 真央里(平成21年生物生産学科卒)	
退職に寄せて	5	在学生の声	28
野堀 嘉裕(昭和55年大学院林学専攻修了)		高木 杏理 亀山 龍太郎	
《特集1》		留学生の声	30
「鶴窓会福島県支部が発足しました」	6	NKURUNZIZA CHRISTIAN	
松村 正彦(昭和56年園芸学科卒)		支部報告	31
《特集2》		北海道支部 庄内支部 村山支部	
「山形大学農学部創立70周年記念事業について」	7	置賜支部 宮城県支部 関西支部	
佐藤 晨一(昭和41年農学科卒)		関東支部	
「第5回山形大学ビーチサッカー大会」の開催	8	追悼	36
齋藤 博行(昭和45年農学科卒)		林田 光祐	
学生研究支援事業について	9	高橋(伊藤) まり子(平成15年生物環境学科卒)	
齋藤 博行(昭和45年農学科卒)		千葉(越智) 温子(平成18年生物環境学科卒、平成20年大学院農学研究科修了)	
平成28年度春の叙勲を拝受	9	討報	38
福嶋 忠昭		鶴窓会事務局からのお知らせ	38
会員の声	10	平成27年度事業並びに活動報告	38
松田 泰二郎(昭和39年農工学科卒)		平成28年度代議員会報告	39
山本 千秋(昭和41年林学科卒)		人事異動	39
種市 英雄(昭和43年農学科卒)		平成28年度事業計画	40
村田 利政(昭和46年農工学科卒)		幹事及び代議員名簿	40
長嶋 清(昭和46年農芸化学科卒)		平成27年度決算・特別会計積立金決算	41
栗田 公司(昭和47年農学科卒)		平成28年度予算・特別会計積立金予算	41
奥山 誠(昭和48年農学科卒)		平成27年度就職状況	42
泉 諸人(昭和51年林学科卒)		編集後記、編集委員	43
及川 浩好(昭和53年農芸化学科卒)		著書の紹介	44
高橋 義典(昭和53年園芸学科卒)		野堀 嘉裕(昭和55年大学院農学研究科修了)	
阿部 利徳(昭和55年農学科卒、昭和57年大学院農学研究科修了)		平 智	
長崎 誠(昭和55年農学科卒)		江頭 宏昌	
鷺見 裕(昭和55年農芸化学科卒、昭和57年大学院農学研究科修了)			
富樫 一幸(昭和57年農学科卒)			
渡邊 雅弘(昭和59年農芸化学科卒)			
齋藤 卓哉(平成3年農芸化学科卒)			
八木 千恵(平成6年園芸学科卒)			
橋本 八右衛門(平成6年農芸化学科卒、平成8年大学院農学研究科修了)			
岩館(大前) 奈穂子(平成13年生物生産学科卒)			
品田 謙一(平成15年生物資源学科卒)			
渡邊(島村) 景子(平成17年生物生産学科卒、平成19年大学院農学研究科修了)			
佐々木 亮祐(平成24年生物環境学科卒)			

《鶴窓会事務局より》

コンビニでの支払いが可能になりましたので是非ご利用下さいますようお願い申し上げます。

農学部長就任のご挨拶



農学部長 林田 光祐

4月1日に夏賀前学部長の後を受け農学部長に就任しました。平成5年に山形大学農学部に助教として赴任してから23年経ち、生まれ育った熊本や青春時代を過ごした北海道よりもここ鶴岡の地での生活が最も長くなりました。新学科の学科長2年と副学部長3年の経験を活かして、2年間の任期をしっかりと務めていきたいと思っております。

山形大学は平成29年度から多くの学部で定員や学科の構成が大きく変わります。そのなかで農学部は1学科6コース制のままです。165名になります。農学系学部の志願者数が全国的に増えていることや食の安全などの課題を解決する社会的ニーズが高まっていることが認められたのだと思います。食関連のキャリア

ムをより充実させるとともに、関連コースの受入枠を増やす予定です。今後も、1学科6コース制の6年間の実績を踏まえ、「地域創生」「次世代形成」「多文化共生」という山形大学の3つの使命を達成するために、コース再編も含めた教育体制の見直しを行い、さらに充実した教育を進められるよう、努力する所存です。

この数年、農学部は高い就職率を維持していますが、大学院教育をさらに充実させることが目標のひとつです。大学院修士課程は3専攻ですが、ここに分野横断型のサブコースをつくって、グローバル化を推進する事業が今年度から始まりました。また、就農を希望する若者等を支援する地域定住農業者育成プロジェクト事業を鶴岡市と共同で立ち上げ、食料自給圏「スマート・テロワール」形成講座という寄附講座を開設しました。いずれもこの4月から始まった農学部の新規事業です。これらの大きなプロジェクトを着実に進めるとともに、各教員が行っている様々な研究成果を発信することも力を入れていきたいと思っております。

さて、来年度は農学部創立70周年を迎える節目の年です。一



昨年に立ちあがった実行委員会ですが、その記念事業を成功させるべく、今年度から本格的に動き始め、準備を進めています。記念式典は平成29年10月14日(土)に東京第二ホテル鶴岡で実施される予定です。記念事業として、記念式典のほか、講演会、祝賀会、記念誌の発行が計画されており、今後広く募金をお願いすることになります。鶴窓会の皆さんには、今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶



食料生命環境学科 准教授 井上 奈穂

平成28年5月1日付で、食品・応用生命科学コース食品栄養化学分野の准教授に着任致しました「井上奈穂(いのうえなお)」と申します。

出身は福岡県糸島市です。佐賀大学農学部応用生物科学科、同大学大学院農学研究科応用生物科学専攻を経て、2007年3月に鹿児島大学大学院連合農学研究科生物資源利用科学専攻の博士後期課程を修了し、博士(農学)の学位を取得いたしました。

学位取得後は日本学術振興会の特別研究員、順天堂大学医学部循環器内科学講座の博士研究員を務め、2009年4月から2016年4月までは東北大学大学院農学研究科食品化学分野の助教を務めておりまし

た。鶴岡に異動しておよそ2ヶ月、前職での仙台在住期間を合わせますと、7年以上、東北地域で生活しているのですが、いまだ東北地方の冬の寒さには順応できておらず、鶴岡の冬を越せるかどうか、と現段階からとても不安に思っております。

私は、学生時代から一貫して「食品由来機能性成分による生活習慣病の予防・改善に関する研究」を行っており、生活習慣病の病態発症連鎖機構の解明および食品成分・薬剤による病態改善において、糖・脂質代謝の調節機構に関する検討を中心に栄養化学的、生化学的および細胞生物学的手法を用いて研究を行っております。そのなかで、過食によつて肥満を生じるモデル動物が肥満度の上昇にともなう脂質異常症、糖尿病、高血圧を発症することに着目し、食環境と遺伝素因の相互関係を評価するモデル系として有用であることを明らかにし、また肝臓や脂肪組織由来の培養細胞を用いた実験系での食品成分機能の評価系およびスクリーニング系の構築などにも携わってまいりました。今後、これらの経験を活かして、研究を進めていきたいと思っております。

教育活動については、初めて経